

平成 22 年 6 月 7 日現在

研究種目：基盤研究（B）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19330187  
 研究課題名（和文）大学の「教育力」育成に関する実証的研究—学生のキャンパスライフからの考察  
 研究課題名（英文）An Empirical Study on the Power of Universities.

研究代表者  
 武内 清（TAKEUCHI KIYOSHI）  
 上智大学・総合人間科学部・教授  
 研究者番号：30012579

## 研究成果の概要（和文）：

大学の教育力を実証的に明らかにしようと考え、文献研究や大学職員へのインタビューや大学生へのアンケート調査を実施してきた。大学生へのアンケート調査は、2007年11月～2008年1月にかけて、全国の14大学（国立3校、私立11校）の大学生2647名に対して行った。その結果、以下の4点が明らかになった。第1に、大学チャーターは大きな教育力を持つこと。第2に大学は大人になる為のイニシエーションの場であること。第3に大学は将来の職業的な基礎を作る場であること。第4に、コミュニティとしての大学の教育力が重要性であること。

## 研究成果の概要（英文）：

I surveyed 2647 students at 14 universities and reported the results to the Japan Society of Educational Sociology. I have developed four main views about university education as follows. First, a university's charter has an educational effect. Second, universities are important as places for initiation into adult society (rite of passage). Third, university classes help build basic occupational ability. Fourth, it is important for a university to play a role in the community.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
総計	4,700,000	1,410,000	6,110,000

研究分野：教育社会学、高等教育

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：大学教育 学生文化 教育力 キャンパスライフ 学生支援

## 1. 研究開始当初の背景

近年、大学教育の改革をめぐる動きが盛んである。多くの大学で新しい教育改革が行われていると同時に、政府もさまざまな支援策を講じている。それらは、大学の「教育力」を育成する試みであるといえることができる。

大学改革の焦点は、これまでのところ、教育課程や教育方法に当てられることが多かった。しかし、学生生活を支援し、学生の成長を促すという視点からすると、教育課程以外の学生の活動（キャンパスライフ）にも注目する必要がある。

学生のキャンパスライフは授業や勉強からだけで構成されてわけではなく、部・サークル活動や友人関係やアルバイトといった授業や勉強以外のさまざまな活動も含めて成り立っており、それらが学生の成長に大きなインパクトを与えている。それらを全て含めて、大学の「教育力」を考える必要がある。

それゆえ、大学の「教育力」育成を考えるためには、授業や勉強以外の分野も視野に入れ、学生のキャンパスライフをトータルに捉える必要がある。

大学が授業だけでなく学生生活全般を通じて学生を教育するという考え方は、アメリカのリベラルアーツカレッジに典型的にみることができる。そこでは、学生と教員が、教養教育や人間形成という共通の目的のために、同じキャンパスに住まい生活をしている（喜多村1993）。このような特徴を持つ大学は、古典的な「コミュニティ」（MacIver,1924）としての特徴をもつものととらえることができる。

現在の大学は、このような共通の目的を教員と学生の間で共有しているわけではない。しかし、学生は大学のさまざまな活動に参加し、帰属感を感じ、影響を受けている。現代でも大学生生活の全体を通じて学生を教育する大学コミュニティが成立しているとも見られる。コミュニティとしての大学の教育力の実態を明らかにする意義は大きい。

この分野の研究面では、欧米のカレッジインパクト研究がある。それらは、大学のさまざまな環境要因の学生への影響を大量のデータで明らかにしようとしているが、心理学的色彩が強く、社会的要因間の関係が明らかでない。また、学生のサブカルチャーの実態を考慮していないので、学生への影響をリアルに把握されていない。

日本においては、文部科学省や全国大学生協の大規模な学生調査があるが、それらは、学生の経済的側面に偏った調査になっていて、学生がトータルなキャンパスライフからどのような影響を受けているのかが明らかでない。個別の大学の学生調査も行われているが、記述的で分析的ではない。

## 2. 研究の目的

以上のような問題意識から、本研究では、大学の「教育力」を、授業や勉強を中心とした教育力だけでなく、コミュニティとしての大学のキャンパスライフ全体に注目し、学生の成長に働く全ての「教育力」を考察の対象にする。

したがって、大学の部・サークル活動、友人関係、恋愛、学生寮、学生支援、キャリア支援、カウンセリング等も含め、さらに大学の伝統やチャーターの効果も含めて大学の「教育力」を考察した。

大学類型ごとでも、「教育力」の特質は違っている。各大学の目指す「教育力」、実際の「教育力」、そしてそれらの学生への影響に関して、各大学、各大学類型別に詳細な考察が必要である。

大学の「教育力」を要素に分解すると、「大学力」「教師力」「職員力」「学生力」という4つに分けることができる。

「大学力」は、大学の伝統、地域的環境、規模、風土、偏差値、チャーター、卒業生の実績、同窓会などからなる大学の総合的な「教育力」である。

「教師力」は、主に授業を通して直接学生に働きかけるものであり、教員の学問的業績、実力、研究・教育意欲、授業内容、授業方法、成績評価、学生に対する接し方など、どのような教師が高い「教育力」をもつのか、実証的に検証すべき事柄である。

「職員力」は、教師以上に学生と直に接する人たちであり、学生への影響力も大きい。また、職員の大学経営への参加も強まっており、「大学力」の一翼を担うようになっている。

「学生力」は、それぞれの大学の学生が持っている教育力である。学生は通う大学にどのような学生がいるかということから大きな影響を受ける。クラスの人間関係、部・サークルでの仲間、先輩-後輩関係、異性との関係、周囲にいる学生からの影響を考察する必要がある。

以上のような4つの教育力の実際の働きをデータで考察する。

## 3. 研究の方法

大学の「教育力」を研究する際に、教育的理念だけで語られることが多いが、大学の実際の「教育力」を、実証的に明らかにする。各大学の「教育力」を、さまざまな既存のデータや、大学や教職員や学生へのアンケート調査、インタビュー調査、観察調査によって、実証的に検証した。

大学生へのアンケート調査は、2007年11月～2008年1月にかけて、全国の14大学（国立3校、私立11校）の大学生2647名の回答を得た。その内容は、キャンパスライフ全体に及んで

いる。すなわち、大学の授業、部・サークル活動、友人関係、恋愛、アルバイト、家庭教育、高校生活、進学動機、将来像、職員、キャリア支援、大学チャーターの効果などである。

さらに、学生の実態に関する資料や調査データの分析や大学のキャリア支援や職員のSDに関する考察を行った。

#### 4. 研究成果

学生へのアンケート調査から明らかになった点は、以下の7点である。

(1)、大学を大学の伝統(創立年)、規模、入学偏差値等により、3つの大学類型を作ることができた。すなわち「伝統総合大学」「中堅大学」「新興大学」の3類型である。大学の3類型で大学教育や学生のキャンパスライフの違いをみると、次のようなことが明らかになった。「伝統大学」は幅広い教育を展開し学生の自主性を重んずる教育をして、学生もモラトリアム期を有効に活用している。一方「新興大学」は学生の資格取得に力を入れている大学が多く、学生も資格取得を目指し、部・サークル活動への参加は少ない。「中堅大学」は、その中間である。このように、大学類型ごとに、目指す「教育力」も違い、その違いが学生のキャンパスライフに反映されていることが明らかになった。

(2) 1997年と比べ、2003年・2007年では、授業によく出席する学生が増えている。また、授業全体に満足する学生、校舎・教室に満足する学生、先生・職員との関係に満足する学生が増加している。授業改善・FD・SDの取組が全国的になされており、それが教員、職員に浸透し、学生の評価につながっていると解釈できる。

(3) このように授業を中心としたキャンパス内に肯定的な意識を持つ、いわゆる「まじめ」な学生が多くなっている。これは、学生の「生徒」化、「子ども」化現象とも解釈できる。学生の自主性、主体性を前提として組み立てられてきたこれまでの大学教育のあり方が問われている。

(4) 大学生の「向授業」的傾向には、小学生時の親の教育的なかわりと、高校時代の勉強態度が大きく関わっている。大学教育と家庭文化、高校までの学校文化・生徒文化とのかかわりが示唆された。

(5) 大学生の「向授業」的傾向には、入学後の施設・環境や人間関係の満足度との関連も非常に大きい。中でも、「今の大学に入ったこと」、「先生との関係」、「就職ガイダンスや就職支援」の3つの要因の規定力がとりわけ強い。また、「職員との関係」も影響している。学生のキャンパスライフへの総合的支援が求められている。

(6) 「向授業」の学生は、非常に規範的で

ある。高校までに学校世界に馴染んだもの(=「まじめな生徒文化」)が、「学校化」された大学の授業にコミットしやすいという構図ができあがっている。大学独自の学問や学生文化の独自性との関連を、大学教育の中にどう位置づけていくのかが課題になっている。

(7) 若者文化への積極的なコミットメントと勉強への積極的な意識や関わりが両立しうることが示された。若者文化との関わりも視野に入れた、キャンパスライフの構築、整備が求められている。

さらに、他の資料分析や職員へのインタビューも含め、大学の教育力を考察して、以下の知見を得た。

第1に、大学チャーター(charter)に教育効果があることが明らかになった。それぞれの大学には、大学の入学偏差値や卒業生の進路に規定されたチャーターやイメージに合わせて、学生が集まってくる。そしてその大学チャーターやイメージに合わせた教育が大学で行われ、教員もその大学のチャーターに合わせて学生への教育を行っている。また、学生自身、チャーターに合わせて他者から期待され、自己規定する。たとえば東大の学生は、東大生というイメージに内外から晒され、それに合わせた自己形成をはかる。大学の社会化機能とは別に、チャーター効果というものがある。

第2に、イニシエーション(通過儀礼)の場としての大学の大切さがある。大学生の期間は、子どもから大人になる過渡期であり、入試(入口)と就職(出口)にはさまれ、根源的知識の探求と厳しい試練がなされる期間である。大学は自由と同時にきびしい試練の場であってこそ通過儀礼としての意味を持つ。厳しい単位認定や卒論審査、厳しい練習が要求される部、サークル活動などが、通過儀礼としての役割を果たし、大学生の成長を培っている。

第3に、大学の授業やゼミで養われる職業的能力の基礎がある。具体的な職業に対応した教育を大学で行うことには限界があるが、情報の収集やその処理能力、集団討議の中でのものを決定していく能力は、大学の授業やゼミで培われている。また、学生は、学問(知)を媒介にしたさまざまな活動を通して人間的に成長する。ゼミや学科などを通しての教員と学生、学生同士のつながりは、クラブ活動や友人関係では得られないものを提供している。大学の中核の活動を大切にしたい。

第4に、コミュニティとしての大学の大切さを強調したい。モラトリアムの時期の大学時代は、大学のさまざまな活動に参加し、教員、職員、先輩、友人とかかわり、

さまざまなキャンパスライフを体験し、知識を蓄積し、人間形成をはかることが大切である。大学のさまざまな活動に参加している人ほど、大学生活への満足度が高いというデータが得られている。大学は一つのコミュニティとしてさまざまな機能を備えている。そのコミュニティとしてのまとまりと多様な機能が、学生の満足度、帰属意識を高め、有意義な大学生活を送ることに繋がる。そのためには、教員だけでなく大学職員、学生や卒業生も含めた、大学のコミュニティ作りが必要である。

このように、大学生は授業・勉強を中心にしながらも、キャンパスライフのさまざまな物的、人的かかわりの中で、多様な活動を展開し成長していつている。学生の入学以前からキャンパスライフを経て卒業まで、その教育力の規定関係のメカニズムを明らかにし、有効な支援をしていくことが大切である。

学生のさまざまな活動をきめ細かく支援する体制、学生が多面的に活動できるコミュニティとしての特質を大学がもつことによって、学生の主体性（「学士力」）も育っていく。

大学や社会はどのような学生支援をしていけばいいのか。大学生の意識に即してまとめると次のようになる。

第1に、冒険して失敗しても大きなダメージにならない場を用意すること。それによって、若者はリスクを心配することなく、全力でチャレンジすることができる。これには、日常生活とは時間的にも空間的にも切り離された「聖」や「遊」の場を作ることと日常生活のセーフティネットを完備することの2つが考えられる。

第2に、現代の大学生の傷つきやすい心情にも配慮が必要であろう。今の大学生は豊かな社会、少子化の中で、ほしいものをあらかじめ与えられ、物質的な苦勞や挫折を知らない。18歳人口の減少、大学入学定員の拡大、入試の多様化などにもとめない受験競争が大幅に緩和され、多くは入試での深刻な挫折体験がない。失敗、挫折体験のない大学生は、些細な失敗にも大きく傷つき、トラウマを後に引きずり、挑戦をしなくなる。

第3に、安定志向、意欲を抑え気味の現代の大学生の行動を嘆くより、大人や社会の若者（大学生）への扱いを見直すことも必要である。フリーターが多いことや就職した若者が3年以内に辞めるのは、若者自身に問題があるというよりは、今の企業の都合によるところが大きい。不況の中で人件費を節約する為に正社員ではなく契約社員やフリーターを雇い、正社員に対しても企業で人を育てるというよりは、過酷な労働で酷使している。

また、若者のやる気やボランティア精神を低賃金で働くことに利用したり、青少年の夢をビジネスに利用したり（「夢市場」）、貧困を利用したり（「貧困ビジネス」）と、大人や企業の方に問題性も多い。

現代の大学生の現状とそれを作り出した大学や社会の仕組みを冷静に見つめながら、現代の大学生の意欲を引き出し、支援していく仕組み（教育力）を、大学の中に作っていくこと今求められている。

[文献]

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計4件)

- ①武内清「現代青年の安定志向」『教育と医学』第58巻1号、2010年、pp/52-59. 査読無
- ②武内清「学習する学生」(『IDE 現代の高等教育』No515,2009年11月、pp.15-19. 査読無
- ③武内清 2008「学生文化の実態と大学教育」『高等教育研究』第11集 日本高等教育学会編 pp.7-23. 査読無
- ④武内清・浜島幸司 2008 「大学生は「子ども社会学」の研究対象になりうるか」『子ども社会研究』14号 pp.151-159. 査読無

[学会発表] (計1件)

武内清・浜島幸司・谷田川岨・山口晶子「キャンパスライフの教育力」日本教育社会学会第60回大会・2008年9月19日、上越教育大学。

[図書] (計2件)

- ① 武内清編『大学の「教育力」育成に関する実証的研究—学生のキャンパスライフからの考察—』2010年、出版社なし、195ページ
- ②武内清編『キャンパスライフと大学の教育力—14大学・学生調査の分析』2009年。出版社なし、154ページ

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

武内清 (TAKEUCHI KIYOSHI)  
上智大学・総合人間科学部・教授  
研究者番号：30012579

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし